

「底が突き抜けた」時代の歩き方 276

遺書に歩いてゆく

『文藝春秋』02年1月号に創刊80周年特別企画として、『遺書 80人 魂の記録』が掲載されている。80通の遺書の書き手は、「男装の麗人」と騒がれ、日本のスパイとして23年3月25日、北京で銃殺刑にされた清朝肅親王の皇女川島芳子(享年41)以外、すべて著名(?)な日本人であり、日本語で書かれている。作家、俳優、皇族、映画監督、画家、詩人、CMディレクター、企業幹部、政治家、落語家、軍人、登山家と多種多様であり、その中に特攻隊員や死刑囚、そして「イジメ」で自殺した大河内清輝君の遺書も交じっている。したがって、年齢も10代から90代まで、自殺死、病死、事故死、刑死、自爆死と、およそ考えられるありとあらゆる死のかたちが並列されている。

当然ながら遺書の内容はさまざまであっても、そこに一つの共通点が貫かれている。それは、遺書を書く時間を誰もが持てたことである。あるいは忍び寄ってくる死を察知して、事前に死を迎える準備を整えていた者もいる。もちろん、予期していない死に突然巻き込まれてしまったならば、遺書どころではない。というより、自分が死んだことすらわからないまま、この世から消えてしまっていたということもあるにちがいない。この間の同時中樞テロで突撃された超高層ビルで働いていた人々や、また飛行機の乗客も共に、自分の死を確認できないまま、この世から旅立ってしまったかもしれない。米軍の空爆にさらされたアフガンの人々もそうだ。

遺書はそれを用意せずに、次の世界へ旅立ってしまう無数の存在があることをより大きく浮かび上がらせている。自分の死を自覚しているすべての人々が、遺書を記すわけではない。財産分与の問題についてしたためておく実務的な遺書を除いて、家族や友人に宛てた遺書にはあるこだわりがみられる。それは自分の死に対するこだわりである。死んでいく自分に対するこだわりといってもよい。どの遺書にもそのこだわりが基調として流れており、家族や友人への最後の私信のかたちをとってそれが噴出しているのが感じられる。人生という舞台から自分が否応なしに永遠に去っていかねばならなくなっており、自分の出番はもう二度とない最後の台詞であることへのこだわりが、遺書には貫かれている。

たとえば昭和62年に肺ガンで死去した俳優の鶴田浩二(62)が最後の色紙に書いた、「孤独と苦悩に耐え得る者ノそれを男と称します」という言葉には明らかに、『戦友の遺骨収集のためのチャリティーショーを開くなど、学徒動員で入隊、20歳の海軍少尉として終戦を迎えた体験を、最後まで忘れなかった』男としての美学へのこだわりが、

包み隠さずあらわれている。また、昭和24年に高血圧が原因で死去した6代目尾上菊五郎(63)の、「まだ足りぬ踊り踊りてあの世まで」、あるいは昭和5年に死去した落語家の三遊亭一朝(83)の、「あの世にも粋な年増があるかしら」という辞世の句の、一見死などにこだわっていないようにみえる軽妙洒脱の裏側に、この世の地続きとしての「あの世」にまで舞台を押し拡げていこうとする遊び心が感じられる。

ただ以上に取りあげた三首の辞世の句はいずれも、老境に入って自分の人生を完結させる死に直面したときの今際の言葉であり、したがってそこには、この世にまだ心を残しておかずにはいられない無念さや哀切はほとんど感じられない。我が生涯に悔いなしの心境で、短い言葉に長い生涯に渡る満足感がこめられているといえる。これらの遺書と最も対照的な位置にあるのが、平成6年11月27日に自宅で自殺した中学生の大河内清輝君(13)の遺書である。愛知県西尾市にある《同中は、市教委に突然死と報告、生徒に口止めをしたが、同級生や地域からの情報、それまでの経緯に不審を抱いた家族が清輝君の部屋を探したところ、遺書を発見。便箋4枚とそれを入れた封筒の裏側にまでびっしりと、「イジメ」の実態が書いてあった。清輝君を脅していた4人は非行事実を認め、遺書の内容は、イジメのほんの一部であると判明。名古屋家裁で処分された。》因みに、映画『リリイ・シュシュのすべて』を撮った岩井俊二監督は、大河内清輝君の遺書を読んだことが同映画製作のきっかけであると語っている。

「いつも4人の人(名前が出せなくてすみません。)にお金をとられてしまいました。そして、今日、もっていくお金がどうしてもみつからなかったし、これから生きていても…。だから…。また、みんなといっしょに幸せに、くらしたいです。しくしく!

小学校6年生ぐらいからすこしだけいじめられ始めて、中1になったらハードになって、お金をとられるようになった。中2になったら、もっとはげしくなって、休みの前にはいつも多いときで60000、少ないときでも30000~40000、このごろでも40000。そして17日にもまた40000ようきゅうされました。だから……。でも、僕がことわっていればこんなことには、ならなかったんだよね。すみません。

もっと生きたかったけど…。家にいるときがいちばんたのしかった。いろんな所に、旅行につれていってもらえたし、何一つ不満はなかった。けど…。

あ、そうそう!お金をとられた原因は、友達が僕の家遊びにきたことが原因。いろんなところをいじって、お金の場所をみつけると、とって、遊べなくなったので、とってこいってこうなった。

オーストラリア旅行。とても楽しかったね。あ、そーいえば、何で、奴らのいいなりになったか?それは、川のでできごとがきっかけ。川につれていかれて、何をするかと思ったら、いきなり顔をドボン。とても苦しいので、手をギュッとひねって、助けをあげたら、また、ドボン。こんなことが4回ぐらいあった。特にひどかったのが、矢作川。深い所は、水深5~6mぐらいありそう。図1(編集部注 原文にはあり)みたいにな

っている。

ここで矢印（編集部注 同）につれていかれて、おぼれさせられて、矢印の方向へ泳いで、逃げたら、足をつかまれてまた、ドボン。しかも足がつかないから、とても恐怖をかんじた。それ以来、残念でしたが、いいなりになりました。あと、ちょっとひどいこととしては、授業中、てをあげるな とか テストきかん中もあそんだ

とかそこらへんです。

家族のみんなへ

14年間、本当にありがとうございました。僕は、旅立ちます。

でもいつか必ずあえる日がきます。その時には、また、楽しくくらしましょう。お金の件は、本当にすみませんでした。働いて必ずかえそうと思いましたが、その夢もここで終わってしまいました。

そして、僕からお金をとっていた人たちを責めないで下さい。

僕が素直に差し出してしまったからいけないのです。しかも、お母さんのお金の2万円を僕は、使ってしまいました（でも、1万円は、和子さんからもらったお年玉で、バッグの底に入れておきました）

まだ、やりたいことがたくさんあったけれど、……。本当にすみません。いつも、心配をかけさせ、ワガママだし、育てるのにも苦労がかかったと思います。おばあちゃん、長生きして下さい。お父さん、オーストラリア旅行をありがとう。お母さん、おいしいご飯をありがとう。お兄ちゃん、昔から迷惑をかけてすみません。洋典、ワガママばかりいっちゃダメだよ。また、あえるといいですね。

最期に、お父さんの財布がなくなったといっていたけれど、2回目は、本当に知りません。

see you again

いつもいつも使いばしりにもされていた。それに、自分にははずかしくてできないことをやらされたときもあった。そして、強せいの的に、髪をそめられたことも。でも、お父さんは僕が自分でやったと思っていたので、ちょっとつらかった。そして20日もまた金をようきゅうされて、つらかった。あと、もっともつらかったのは、僕のへやにいるときに彼らがお母さんのネックレスなどを盗んでいることを知ったときは、とてもショックだった。

あと、お金もとっていることも…。

自殺した理由は今日も、40000 とられたからです。そしてお金がなくて、「ってこれませんでした」っていても、いじめられて、もう一回ってこいっていわれるだけからです。そして、もっていかなかったら、ある1人にけられました。そして、そいつに「明日『12万円』もってこい」なんていわれました。そんな大金はらえるわけありません。それにおばあちゃんからもらった、1000円も、トコヤ代も全て、かれらに

とられたのです。そして、トコヤは自分でやりました。とてもつらかったでした。(2 3 日)

また今日も、一万円とられました (2 4 日)

そして今日は、2万円もとられ、明日も4万円ようきゅうされました (2 5 日)

あと、いつも、朝はやくでるのも、いつもお茶をもっていくのも、彼らのため、本当に何もかもがいやでした。

なぜ、もっと早く死ななかったかということ、家族の人が優しく接してくれたからです。学校のことなど、すぐ、忘れることができました。けれど、このごろになってどんどんいじめがハードになり、しかも、お金もぜんぜんないのに、たくさんだせ、といわれます。もう、たまりません。最期も、ご迷惑をかけてすみません。忠告どおり、死なせてもらいます。でも、自分のせいにされて、自分が使ったのでもないのに、たたかれたり、けられたりって、つらいですね。

僕は、もう、この世からいません。お金もへる心配ありません。一人分食費がへりました。お母さんは、朝、ゆっくりねれるようになります。ようすけも勉強に集中できます。いつもじゃまばかりしてすみませんでした。しんで、おわびいたします。

あ、まだ、いいたいことがありました。どれだけ使い走りにさせられたかわかりますか。なんと、自転車で、しかも風が強い日に、上羽角から、エルエルまで、たしか1時間でいってこいっていわれたときもありました。あの日はたしかじゅくがあったと思いました。あと、ちょくちょく夜でいていたり、帰りがいつもより、おそいとき、そういう日はある2人のために、じゅくについていっているのです。そして今では「パシリ1号」とか呼ばれています。あと、遠くへ遊びにいくとかいって、と中で僕が返ってきたってケースもありませんでしたか。

それは、金をもっととってこいっていわれたからです。

あと、僕は、他にいじめられている人よりも不幸だと思います。それは、なぜかという、まず、人数が4人でした。だから、1万円も4万円になってしまうのです。しかもその中の3人は、すぐ、なぐったりしてきます。あと、とられるお金のたんいが1ケタ多いと思います。これが僕にとって、とてもつらいものでした。これがなければいつまでも幸せで生きていけたのにと 생각합니다。

テレビで自殺した人のやつを見ると、なんで、あんなちょっとしか、とられてないんだろうっていつも思います。最後に、おばあちゃん、本当にもうしわけありませんでした。

お金をとられはじたのは、1年生の2学期ぐらいから。

お母さんは、昔、教会につれていくっていったこともあったよね。あのときは、とてもいきたかった。

(つけたし) 日曜日にもまた、2万円と1万円をようきゅうされました。そういえば、なぜ、ぼくが今度お金をとったら、「しせつにいく」といったか。それは、そっちの方が

幸せだと思ったから。いつも、彼らから、遊ばっていうんだ。そして、いけないと……

次の日にたくさんのお金をとられちゃうんだ。だからテスト週間でもあそばないといけなかったんだ。1年生のころは、彼らも、先輩につかまっていたから、勉強もできた。」
「もっと生きたかった」のに、追い詰められて死なざるをえない口惜しさよりも、家族への別れを丁寧に行って、辛い日々から解放されることの安堵感が遺書に漂っていることが却って、読む者の気持をより一層締めつけていくような気がする。人生を完結させることができず、人生の入り口で躓いてしまったとしかいいようのない幼い自殺死から発される別れの言葉が、ここには詰まっている。大河内君の遺書は、この世から自分一人がひっそりと消え去っていくことの詫びであり、なぜ死なざるをえないのかを縷々説明しているが、死んでいく自分のことよりも、一人残される幼い妹に最後まで寄り添いつづけようとして、言葉が発された遺書も垣間見られる。

《3月の大阪大空襲で父(44歳)を、4月には母(44歳)を相次いで亡くし、11歳の妹・静恵が伯父の元に引き取られていた。静恵がつくった特攻人形を「突入する時に人形が怖がると可哀そう」だと、背中に吊って》、昭和20年、沖縄洋上の艦船に突入、戦死した第6航空軍特攻隊の大石清の遺書。

「なつかしい静ちゃん！

おわかれの時がきました。兄ちゃんはいよいよ出げきします。この手紙がとどくころは、沖なは(沖縄)の海に散つてゐます。思ひがけない父、母の死で、幼ない静ちゃんを一人のこしていくのは、とてもかなしいのですが、ゆるして下さい。

兄ちゃんのかたみとして静ちゃんの名であづけてゐたいというびん(郵便)通帳とハンコ、これは静ちゃんが女学校に上るときにつかつて下さい。時計と軍刀も送ります。これも木下のをぢさんにたのんで、売つてお金にかへなさい。兄ちゃんのかたみなどより、これからの静ちゃんの人生のはうが大じなのです。

もうプロペラがまはつてゐます。さあ、出げきです。では兄ちゃんは征きます。泣くなよ静ちゃん。がんばれ！」
(神坂次郎『今日われ生きてあり』より)

手紙のかたちを借りた遺書はよくみられるが、これは遺書のかたちを借りた手紙にほかならない。いうまでもなく幼い妹への最後の手紙である。生きて妹を見守ることができなくなっている場所からすでに、死んであの世からずっと見守っていかうとする場所へと移っている。それは自分の死の確認よりも、妹の人生の今後の歩みへと視線が集中していることとよく見合っている。だからこそ、より一層特攻隊員として散っていく彼の、けっして表に出さない働(どうく)哭が切々と伝わってくるのである。「泣くなよ静ちゃん。がんばれ！」という結びの文句は、もう何万遍も突入の瞬間まで彼の心の中で唱えられていたにちがいないその思いが、この遺書の中に忍び込んできたことが窺われ、文句のありきたりさに逆に力がこもっている。

遺書は大体において、死へと向かう心の準備がすでになされている。つまり、かつて

は遠くにあった死が自分に向かってどんどん近づいてくる、その死からの接近を自分が受け入れつつあるところで遺書は練られようとする。他人の死についての対話は何度か試みたことがあるかもしれないが、いよいよ自分の死についての対話を自分の中で行わねばならない最後のときが迫ってきたのだ。一体、死は自分からどのような最後の言葉を引き出そうとするのか。あるいは、目前の死を前にして一体、自分は自分に向かって最後になにを語りかけるのか、自分からどのような言葉を絞りだそうとするのか。だから、遺書にはまとまった時間が必要だ。だけど、死は予期せぬかたちで突然襲ってくるものでもある。自分の死が直前に押し迫っていることは感じられても、遺書をしたための準備もなく、時間が急迫しているとき、メモのかたちででも遺書を殴り書きしておこうとする衝動が突き上がってくることもある。

昭和60年8月12日、《大阪商船三井船舶（当時）神戸支店長として、東京本社での支店長会議に参加、単身赴任先の神戸に帰るため搭乗中》、日航ジャンボ機の御巣鷹山墜落事故に遭った河口博次（52）の《遺書は、社員手帳7ページにわたって走り書きされており、紛失を防ごうとしたのか、背広の内ポケットに収めてあった。》

「マリコ、津慶、知代子、どうか仲良くがんばってママをたすけて下さい パパは本当に残念だ、きっと助かるまい 原因は分らない 今5分たった もう飛行機には乗らない どうか神様たすけて下さい

きのうみんなと食事したのは最後とは

何か機内で爆発したような形で煙が出て降下しだした どこえどうなるのか 津慶しつかりた（の）んだぞ

ママ こんな事になるとは残念だ さようなら 子供達の事をよろしくたのむ今6時半だ、飛行機はまわりながら急速に降下中だ 本当に今迄は幸せな人生だったと感謝している」
（「毎日新聞」昭和60年8月19日）

墜落しつつある中でメモられた臨場感がそこに漂っている。突然の不意打ちを喰らってしたためられた言葉ではあるが、恐怖心に襲われながらも、よくも書きとめられたものだと思う。死のまさしく直前という意味で、この遺書こそ今際の際に押し出された言葉という気がする。最初に触れた三首の辞世の句以外、ここにその全文を転載した三通の遺書はすべて無名の人々であり、しかも遺書の内容もすべて家族宛の手紙になっている。中学生の大河内君は両親、兄弟、祖母に向けて、特攻隊員の大石氏はたった一人の妹に向けて、会社員の河口氏は妻、息子、娘に向けて、最後の言葉が発されている。このことは、人が世を去るときに最後の言葉を最も伝えたい相手は、共に暮らしてきた家族であることを物語っているにちがいない。家族の一員である自分は息子としてであれ、兄としてであれ、父親としてであれ、かけがえのない存在であることが自然に熟知されているからだ。

企業の支店長という役職を負っているのであれば、一言ぐらい会社に言及することが

あってもいいと思われるかもしれないが、企業人として死ぬのではなく、一人の個人としてでもなく、家族の中の一人として意識されるのが最も自然なのであろう。企業人としての自分は取り替えのきく存在にすぎないからだ。もちろん、掲載されている遺書の中には、企業の売り込みをめぐる疑惑で東京地検特捜部の事情聴取を受け、「会社の生命は永遠です。その永遠のために私達は奉仕すべきです。」という遺書を残して、飛び降り自殺した日商岩井元常務の島田三敬（５６）のケースも収められている。彼は企業人としての責任を負って、企業人として死んだのだから、その遺書がそのような内容に「収斂^{しゅうれん}」するのは当然だとしても、かけがえのない家族の一員として最後に発すべき言葉が企業人としての言葉に抑圧されてしまっていると考えるなら、遺書もまた、本人と共に飛び降り自殺しているのかもしれない。

「心身の不自由は進み、病苦は堪え難し。去る６月１０日、脳梗塞の発作に遭いし以来の江藤淳は形骸に過ぎず。自ら処決して形骸を断ずる所以なり。乞う、諸君よ、これを諒とせられよ。」という遺書を残して、平成１１年７月２１日に自殺した文芸評論家の江藤淳（６６）のように、その遺書も公開を前提とした最後の作品とみられなくはない。少なくとも物書き等の著名人の遺書は公開が前提とされているが、辞世の句以外の三通の遺書はいうまでもなく家族以外の者への公開は前提とされていない。すでにこの世に存在しなくなっている彼らは、雑誌等に掲載されて自分たちの遺書が全く見知らぬ赤の他人に読まれていることなど知る由もない。はたして、こういったことは許されることなのだろうか。人として控えなくてはならないことのような気がする。。故人の心の中の墓標を踏み荒らす行為に等しくはないだろうか。

この文章を書きながら見知らぬ他人（故人）の遺書を他の文章を読むように雑誌で読み、そのうちのいくつかをここに書き移していく行為は、考えれば考えるほど奇妙な感じがする。商業雑誌に掲載されることも、それを多くの人が当然のように読むことも、もしかすると、ある一線を越えた行為ではないだろうか。遺書だからいけないというのではない。本人が公開を前提としていない最後の手紙であることに引っかかりを覚えるのだ。本人にもはや了解を求められないし、どのように読んだかを伝える術も見失われている。ここに書き写した遺書はいずれも家族に向かって切々と語りかけている。たぶんそれを読む家族のほうも、もう二度と発されることのないそれらの言葉を、自分たちの深い所で受けとめようとするだろう。しかし、全く無関係な他人は単なる活字としてその遺書に接するにすぎない。要するに、消費していくだけだ。現在の活字文化、情報化社会ではそんなことは当然なのだろうが、やはり取り返しのつかない歪みに我々が溺れている感じがしてならない。ここに書き写してきた遺書に対しては、自分自身の遺書を指し向ける覚悟なしには、それらの残骸が並べられているにすぎない、という声が遙か彼方からますます響いてくる。

２００２年１月２７日記

